

土地分類基本調査

小 泊

5万分の1

国 土 調 査

青 森 県

1994

序 文

都道府県土地分類基本調査は、限りある国土の適正な利用、開発および保全に資することを目的として国土調査法に基づき県が実施しております。

この調査は、国土地理院発行の縮尺5万分の1の地形図をベースに、地形、表層地質、土壌等の自然的条件を化学的かつ体系的に明らかにし、地域の特性に応じた各種の土地利用計画の企画、立案のための基礎資料とするものであります。

本県では、昭和40年3月に経済企画庁から、「八戸」図幅が発行されて以来、県内42図幅のうち本図幅で23図幅を完成させることができました。

この成果が行政上はもちろん、各方面で広く活用されることを希望するとともに、調査の実施に、御協力いただいた関係各位に対し深く感謝の意を表します。

平成7年3月

青森県農林部長

荒 木 喜一郎

調査担当者一覧表

総合・企画指導 国土庁土地局国土調査課

総 括 青森県農林部農地計画課

地形分類調査 弘前大学教育学部 教 授 水 野 裕
八戸工業高等専門学校 教 授 堀 田 報 誠

表層地質調査 弘前大学理学部 助 手 根 本 直 樹

土 壤 調 査

山地丘陵地の土壌（林地）

青森県林業試験場 技 師 中 嶋 敏 祐
東北エンジニアリング（株） 環境アセス部次長 松 尾 弘

台地および低地の土壌（農用地）

青森県農業試験場 環 境 部 長 成 田 春 蔵
青森県農業大学校 非 常 勤 講 師 相 馬 駿 春

土地利用現況調査 青森県農林部農地計画課 主 幹 笹 森 金 治

目 次

序 文

総 論

I 位置および行政区画	1
1. 位 置	1
2. 行政区画	2
II 地域の特性	4
1. 地勢・気候	4
2. 人口と世帯数	8
3. 交 通	9
4. 産 業	10

各 論

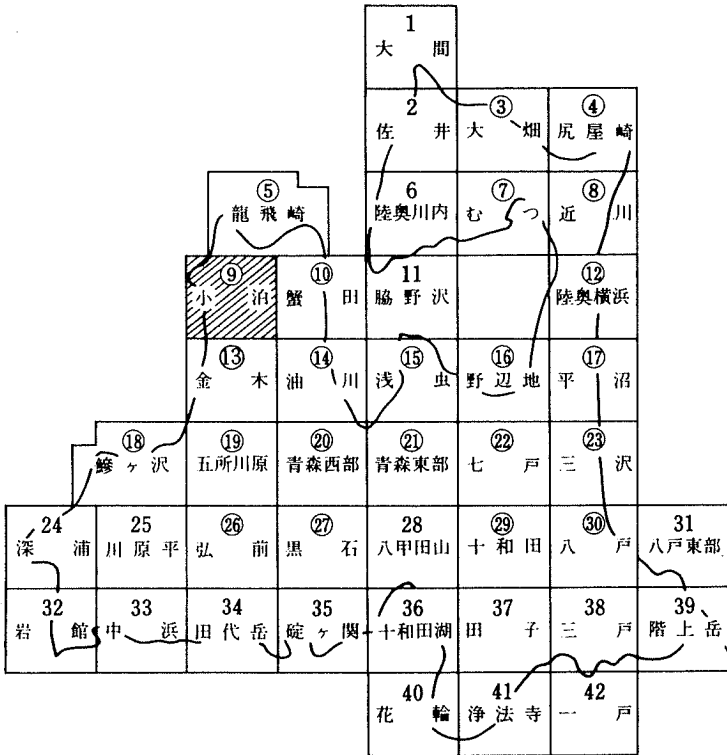
I 地形分類図	13
1. 地形概説	13
2. 地形細説	14
II 表層地質図	21
1. 地質概説	21
2. 表層地質細説	22
3. 表層地質分類と開発および保全との関係	29
III 土壌図	34
1. 土壌分類の細説	34
(1) 山地、丘陵地および台地の土壌	34
(2) 低地の土壌	38
IV 土地利用現況図	41

総論

I 位置および行政区画

1. 位置

第1図 位置図



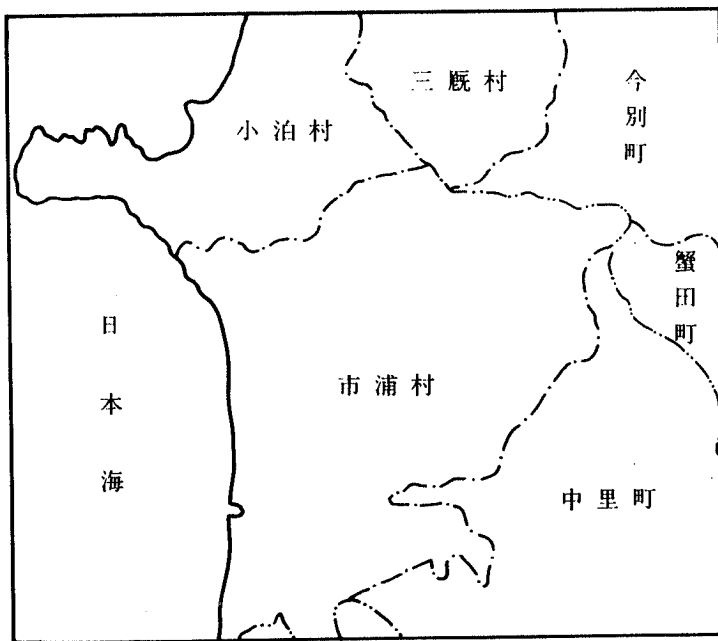
注) ○印は印刷発行済図幅である。

2. 行政区画

本図幅内の行政区画は、市浦村、小泊村、中里町、三厩村、今別町、蟹田町、車力村からなっており、その展開は第2図のとおりである。

この図幅に占める7町村面積の割合は、第1表に示すように当該町村全体の38.5%である。

第2図 行政区画図



第1表 市町村面積

(単位：km²：%)

区分	全 体 面 積		図 幅 内 面 積		占有率 $\frac{B}{A}$
	面積 (A)	比率	面積 (B)	比率	
蟹 田 町	116.39	16.7	9.99	3.8	8.6
今 別 町	125.24	18.0	34.11	12.7	27.2
三 厩 村	65.27	9.4	24.63	9.2	37.3
車 力 村	62.17	8.9	1.95	0.7	3.1
中 里 町	151.63	21.8	64.54	24.1	42.6
市 浦 村	111.74	16.0	93.40	34.8	83.6
小 泊 村	64.49	9.2	39.97	14.7	62.0
計	696.93	100.0	268.59	100.0	38.5

- 建設省国土地理院「平成5年度全国都道府県市区町村別面積調」(平成5年10月1日現在)
- 図幅内面積，5万分の1地形図をプランメーターにより計測したものである。

II 地域の特性

1. 地勢、気候

(1) 地勢

この地域は青森県の北西部に位置し、津軽半島の西部にあたる。図幅の西側は日本海に面し、南側に位置する十三湖周辺の低地を除いて海蝕崖となっており、中央部の標高713.7mの増川岳をはじめとする400m～200mの山岳地帯は中山山脈で殆どが国有林に占められている。

十三湖は15km²余の湖水面積を有し、津軽平野をうるおす長さ100km余の岩木川を始め山田川、鳥谷川など大小河川が十三湖を経て日本海に注いでいる。

(2) 気候

図幅内に位置する市浦村地域気象観測所、今別地域観測所、蟹田地域気象観測所の3ヶ所の記録による。

十三湖周辺近くは、低い中山山脈を吹き寄せるやませを直接受ける機会が、津軽平野中上流部に比べて多く、従って冷害による被害も多い。また日本海からの冬の季節風にさえぎられることがなく、この地域独特の「地ふぶき」と呼ばれる地表面での暴風雪が交通に支障をきたし、生活環境が厳しい。

月 別 気 象 表

蟹田地域気象観測所

第2表(1)

区分	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	備 考
日最高気温高い(°C)	10.9 (54)	12.4 (54)	15.7 (57)	24.5 (62)	27.2 (58)	29.8 (62)	32.8 (61)	33.0 (56)	31.5 (60)	24.4 (62)	18.5 (2)	17.4 (2)	昭和54年 ~平成2年
日最高気温低い(°C)	-7.2 (61)	-7.0 (59)	-3.4 (55)	2.1 (55)	6.3 (59)	11.2 (57)	12.4 (61)	16.4 (55)	15.7 (56)	6.1 (59)	-2.1 (62)	-6.8 (59)	"
日最低気温高い(°C)	3.9 (58)	2.5 (2)	5.2 (2)	11.4 (58)	13.8 (58)	18.5 (54)	22.8 (56)	24.0 (60)	22.6 (2)	16.9 (61)	13.0 (60)	10.9 (2)	"
日最低気温低い(°C)	-14.0 (61)	-14.0 (63)	-13.6 (61)	-8.4 (59)	-0.5 (63)	4.4 (58)	8.8 (54)	9.6 (54)	3.7 (55)	-0.8 (58)	-6.0 (57)	-12.2 (58)	"
月平均気温高い(°C)	-0.1 (元)	-1.1 (2)	3.8 (元)	9.2 (58)	13.0 (2)	17.4 (2)	20.9 (59)	24.6 (60)	19.6 (2)	13.4 (2)	8.7 (2)	3.8 (2)	"
月平均気温低い(°C)	-4.2 (60)	-3.8 (59)	-1.3 (59)	3.3 (59)	9.6 (59)	13.4 (58)	16.2 (63)	18.2 (55)	16.3 (56)	9.6 (58)	3.1 (56)	-0.9 (60)	"
月平均気温(°C)	-2.1	-1.8	1.4	6.6	11.5	15.5	18.9	22.0	18.0	11.7	5.7	1.1	"
1時間降水量(mm)	7 (59)	7 (57)	9 (54)	8 (61)	11 (57)	24 (54)	29 (58)	30 (2)	24 (元)	21 (54)	26 (54)	9 (62)	"
日降水量(mm)	22 (2)	19 (54)	52 (元)	40 (61)	69 (57)	93 (54)	108 (2)	119 (56)	112 (2)	117 (54)	70 (54)	32 (57)	"
月降水量多い(mm)	157 (2)	117 (58)	96 (54)	148 (57)	179 (57)	303 (54)	353 (62)	297 (56)	362 (2)	305 (54)	211 (54)	146 (54)	"
月降水量少ない(mm)	47 (60)	39 (62)	20 (61)	22 (62)	23 (59)	49 (59)	36 (57)	47 (57)	50 (62)	72 (62)	62 (59)	40 (61)	"
日最大風速風向(m/s)	11WNW	10WNW	15WNW	13W	11W	9WNW	11W	13W	12W	12W	11W	10W	"
月最深積雪(cm)	125 (59)	160 (59)	156 (59)	107 (59)							42 (50)	70 (59)	昭和36年 ~平成2年

() は発生年次

月別気象表

今別地域気象観測所

第2表(2)

月別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	備考
日最高気温高い(°C)	11.3 (54)	12.3 (54)	14.5 (55)	23.7 (58)	26.1 (55)	30.8 (62)	31.6 (61)	32.8 (56)	29.8 (60)	28.7 (62)	19.2 (54)	15.8 (2)	昭和54年 ~平成2年
日最高気温低い(°C)	-7.7 (61)	-7.5 (59)	-2.3 (57)	2.4 (55)	6.3 (62)	11.2 (59)	13.0 (61)	16.6 (62)	15.7 (58)	6.1 (58)	-2.2 (62)	-7.2 (59)	"
日最低気温高い(°C)	4.4 (2)	5.4 (62)	4.9 (57)	12.3 (68)	17.1 (60)	20.3 (2)	23.8 (56)	24.5 (61)	22.0 (2)	17.5 (60)	13.8 (54)	12.0 (2)	"
日最低気温低い(°C)	-10.7 (61)	-9.6 (59)	-9.0 (61)	-4.2 (69)	1.1 (63)	3.9 (60)	9.4 (54)	11.9 (54)	6.5 (59)	2.5 (58)	-6.1 (57)	-10.4 (59)	"
月平均気温高い(°C)	0.7 (元)	1.4 (2)	4.1 (2)	9.8 (68)	13.1 (2)	17.4 (55)	21.2 (56)	24.5 (60)	19.4 (2)	14.4 (54)	9.4 (2)	4.3 (2)	"
月平均気温低い(°C)	-3.8 (60)	-3.2 (59)	-0.6 (59)	3.9 (59)	9.7 (59)	13.5 (58)	16.4 (63)	18.6 (55)	17.1 (56)	10.7 (58)	4.4 (56)	-0.3 (60)	"
月平均気温(°C)	-1.5	-1.2	1.9	7.0	11.8	15.5	19.0	22.0	18.2	12.6	6.6	1.9	"
1時間降水量(mm)	11 (54)	8 (59)	9 (54)	10 (56)	15 (57)	21 (54)	36 (2)	45 (55)	22 (54)	17 (54)	17 (56)	10 (57)	"
日降水量(mm)	34 (54)	29 (54)	62 (元)	50 (61)	66 (57)	68 (63)	94 (2)	141 (54)	90 (61)	118 (54)	54 (54)	41 (57)	"
月降水量多い(mm)	214 (56)	120 (58)	129 (62)	179 (57)	194 (57)	229 (54)	345 (62)	323 (56)	342 (元)	331 (54)	238 (元)	191 (54)	"
月降水量少ない(mm)	80 (63)	59 (元)	44 (2)	57 (62)	28 (54)	38 (62)	43 (57)	34 (57)	42 (62)	88 (57)	80 (59)	89 (61)	"
日最大風速風向(m/s)	12NW (62)	12NNW (58)	12W (54)	11SSE (58)	10SSE (61)	8SSE (57)	8WSW (62)	10SSE (57)	11SSE (61)	12WNNW (54)	11NNW (58)	11NW (58)	"
月最深積雪(cm)	133 (56)	155 (59)	150 (59)	117 (59)							32 (50)	63 (59)	昭和39年 ~平成2年

() は発生年次

月 別 気 象 表

第2表(3)

市浦地域気象観測所

区分	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	備考
日最高気温高い(°C)	11.2 (54)	11.6 (54)	14.4 (2)	24.3 (62)	25.7 (59)	29.4 (3)	33.8 (元)	34.1 (59)	31.4 (60)	23.9 (57)	18.8 (4)	15.9 (2)	昭和52年 ~平成4年
日最高気温低い(°C)	-6.2 (61)	-6.8 (59)	-2.4 (55)	2.2 (55)	6.4 (54)	10.9 (58)	13.5 (61)	16.4 (55)	15.0 (56)	7.5 (58)	-1.6 (62)	-6.0 (59)	"
日最低気温高い(°C)	5.3 (63)	4.1 (62)	5.7 (2)	0.2 (52)	14.8 (58)	18.5 (54)	23.8 (元)	24.6 (59)	24.3 (53)	17.3 (60)	14.3 (52)	11.9 (2)	"
日最低気温低い(°C)	-13.6 (52)	-16.4 (52)	-13.0 (61)	-7.4 (59)	0.8 (63)	4.9 (58)	8.1 (54)	9.7 (54)	5.6 (55)	-0.3 (55)	-5.9 (4)	-12.2 (62)	"
月平均気温高い(°C)	0.8 (元)	1.5 (2)	4.4 (2)	9.8 (58)	13.2 (3)	20.5 (53)	23.9 (53)	25.5 (60)	19.5 (61)	14.1 (54)	10.2 (53)	6.2 (54)	"
月平均気温低い(°C)	-3.4 (52)	-3.5 (53)	-0.4 (59)	4.3 (59)	10.3 (56)	11.8 (52)	17.0 (63)	18.8 (55)	16.7 (56)	10.9 (58)	5.2 (63)	0.1 (58)	"
月平均気温(°C)	-1.0	-1.1	2.1	7.4	11.9	16.3	20.1	22.4	18.3	12.7	7.2	2.5	"
1時間降水量(mm)	7 (2)	7 (4)	9 (60)	15 (60)	21 (57)	19 (54)	50 (59)	33 (62)	27 (4)	22 (58)	18 (2)	11 (54)	"
日降水量(mm)	26 (2)	30 (3)	56 (元)	40 (54)	72 (58)	81 (63)	74 (62)	90 (56)	79 (元)	73 (60)	49 (元)	48 (53)	"
月降水量多い(mm)	185 (2)	151 (3)	94 (54)	106 (54)	164 (57)	235 (54)	314 (62)	319 (56)	323 (元)	200 (60)	227 (52)	165 (54)	"
月降水量少ない(mm)	24 (4)	25 (元)	32 (3)	20 (62)	29 (54)	39 (60)	41 (元)	45 (元)	49 (62)	87 (63)	47 (59)	48 (61)	"
日最大風速風向(m/s)	9N (57)	11E (60)	10NW (54)	10E (59)	9E (56)	8E (4)	8E (2)	8E (3)	10NE (57)	10NNW (54)	12E (2)	9E (2)	"
月最深積雪(cm)	68 (52)	102 (60)	90 (59)	55 (59)							12 (54)	49 (59)	昭和52年 ~平成4年

() は発生年次

2. 人口・世帯数

図幅内7町村の、昭和55年から平成2年までの国勢調査による人口状態は、この10年間で18.0%の8,690人が減となっている。

世帯数も同様に、11.0%1,343世帯減になっており、1世帯当りの平均人員3.53人は、県平均3.26人に比べ0.27人多い。

人口を地域別にみると、車力村だけは変動ないものその他は減少している。

第3表 市町村別人口と世帯数

(単位：人口、世帯)

市町村	年別区分	昭和55年	昭和60年	平成2年	$\frac{C}{A} \times 100$	1世帯当りの平均人員		平成2年 1km当り 人口密度
		国勢調査	国勢調査	国勢調査		55年	2年	
		(A)	(B)	(C)				
市浦村	人口	4,059	3,752	3,368	82.9			
	世帯数	1,085	1,052	1,044	96.2	3.74	3.22	39.7
小泊村	人口	5,698	5,263	5,124	89.9			
	世帯数	1,489	1,379	1,420	95.3	3.82	3.60	79.4
中里町	人口	14,270	13,305	12,230	85.7			
	世帯数	3,280	3,262	3,177	96.8	4.35	3.84	80.6
三厩村	人口	6,030	4,298	3,128	51.8			
	世帯数	2,070	1,396	1,030	49.7	2.91	3.03	47.9
今別町	人口	7,113	6,099	4,978	69.9			
	世帯数	1,791	1,782	1,621	90.5	3.97	3.07	98.8
蟹田町	人口	5,110	5,126	4,626	90.5			
	世帯数	1,378	1,411	1,387	100.6	3.70	3.33	39.7
車力村	人口	6,012	6,711	6,148	102.2			
	世帯数	1,466	1,554	1,537	104.8	4.10	3.34	30.1
計		48,292	44,554	39,602	82.0			
		12,559	11,836	11,216	89.3	3.84	3.53	56.8

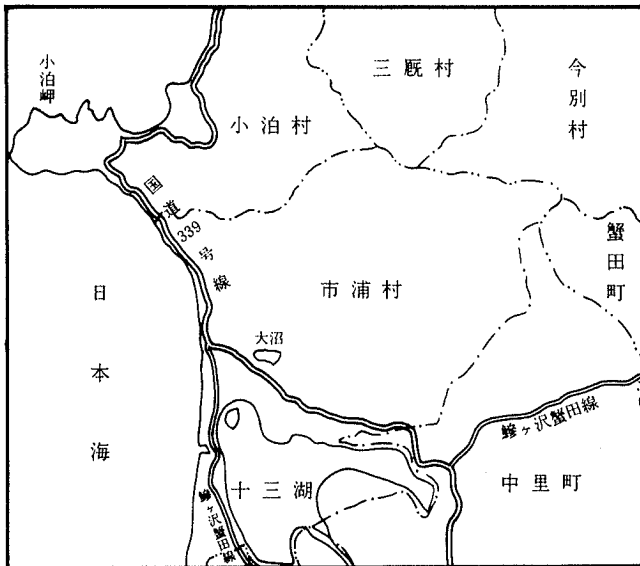
国勢調査

3. 交通

この地域における交通体系は、第3図に示すとおりであるが、一般国道の339号線は津軽平野を南北に縦断し、十三湖から日本海に沿って北上し小泊村から竜泊ラインで三厩村まで続いている。

他に主要地方道として、鱈ヶ沢～蟹田線が国道339号線に連絡している。

第3図 主要交通図



4. 産 業

7 町村の産業別就業人口は、昭和60年の国勢調査時点に比べ平成2年では、小泊村が僅かに増えたものの、全体では11.6%の2,357人が減っている。これを産業別にみると第1次産業は17.8%の1,467人が減となり、この内農業が1,345人減で大半を占め農業離れが進んでいることがわかる。

また、第2次産業も12.8%の741人減り、第3次産業が2.3%の149人が僅かに減っている状況にある。

この地域は農業、漁業を主体とする地域であるが、産業別純生産においては第1次産業から第3次産業まで耕地面積の少ない三厩村を除いて他町村は同程度の割合を示している。

製造業の事業所数及び商店数においても突出して多い町村もなく、農村地域であることがうかがえられ、農業粗生産額については、中里町と車力村が群を抜いて多く、他町村は漁業が生活基盤のため少ない。

第4表 産業別就業人口

(単位：百万円、%)

区分 町村	総 数	第 1 次 産 業				第 2 次 産 業				第 3 次 産 業
		農 業	林 業	漁 業	計	鉱 業	建設業	製造業	計	
市 浦 村	(1,695)	(414)	(96)	(136)	(646)	(25)	(231)	(240)	(496)	(553)
	1,575	385	55	156	596	8	183	249	440	539
小 泊 村	(2,028)	(39)	(11)	(729)	(779)	(1)	(336)	(225)	(562)	(687)
	2,099	23	12	793	828	8	263	336	600	671
中 里 町	(6,244)	(3,162)	(142)	(2)	(3,306)	(-)	(766)	(530)	(1,296)	(1,642)
	5,789	2,500	106	2	2,608	5	741	805	1,551	1,630
三 厩 村	(1,890)	(8)	(109)	(220)	(337)	(1)	(836)	(144)	(981)	(572)
	1,243	10	65	208	283	1	207	197	405	561
今 別 町	(2,725)	(383)	(171)	(203)	(757)	(-)	(731)	(206)	(937)	(1,031)
	2,145	275	118	168	561	-	378	293	671	913
蟹 田 町	(2,569)	(456)	(129)	(249)	(834)	(1)	(557)	(271)	(829)	(906)
	2,245	304	103	273	680	-	299	321	620	945
車 力 村	(3,198)	(1,546)	(9)	(19)	(1,574)	(-)	(380)	(296)	(676)	(948)
	2,890	1,166	8	36	1,210	1	307	441	749	931
計	(20,349)	(6,008)	(667)	(1,558)	(8,233)	(28)	(3,837)	(1,912)	(5,777)	(6,339)
	[100]				[40]				[28]	[32]
	17,992	4,663	467	1,636	6,766	16	2,378	2,642	5,036	6,190
	[100]				[38]				[28]	[34]

平成2年国勢調査による。 () 内数字は昭和60年国勢調査
 総数には「分数不能の産業」を含む。 [] 内数字は構成比 %

第5表 市町村別産業別純生産

(単位：百万円，%)

区分 市町村	生産所得	第1次産業				第2次産業				第3次 産業
		農業	林業	漁業	計	鉱業	建設業	製造業	計	
市浦村	(100) 5,824	431	314	218	(16.5) 963	0	1,535	520	(35.2) 2,055	(48.3) 2,806
小泊村	(100) 6,996	49	221	1,103	(19.6) 1,373	0	1,568	501	(29.6) 2,069	(50.8) 3,554
中里町	(100) 16,315	2,768	399	18	(19.5) 3,185	15	2,207	1,684	(23.9) 3,906	(56.6) 9,224
三厩村	(100) 5,588	23	162	262	(8.0) 447	205	1,128	543	(33.6) 1,876	(58.4) 3,265
今別村	(100) 6,793	274	411	150	(12.3) 835	0	944	356	(19.1) 1,300	(68.6) 4,658
蟹田町	(100) 9,531	293	456	681	(15.0) 1,430	9	1,458	1,495	(31.1) 2,962	(53.9) 5,139
車力村	(100) 11,132	2,113	6	81	(19.8) 2,200	629	1,852	967	(31.0) 3,449	(49.2) 5,483
計	(100) 62,179	5,951	1,969	2,513	(16.8) 10,433	858	10,693	6,066	(28.3) 17,617	(54.9) 34,129

青森県企画統計課「平成3年度市町村所得統計」()内数字は構成比

第6表 製造業と商業

(単位：人、万円)

市町村	区分	製造業(4年度)			商業(3年度)		
		事業所	従業者数	出荷額	商店数	従業員数	年間販売額
市浦村		13	274	181,404	72	148	136,700
小泊村		13	231	124,357	92	229	194,400
中里町		30	895	491,240	163	519	739,000
三厩村		6	152	163,265	76	191	179,700
今別町		7	213	105,486	114	264	249,900
蟹田町		8	286	460,185	93	248	311,600
車力村		12	528	316,550	104	343	358,000
計		89	2,579	1,842,487	714	1,942	2,169,300

青森県企画部統計課「平成4年度青森県の工業」、「平成3年青森県の商業」

第7表 農業粗生産額(平成4～5年)

(単位：人、百万円)

市町村	区分	粗生産額	耕種					畜産			その他	養蚕	加工農産物
			米	麦雑類	野菜	果実	工芸農作物及びその他	乳肉牛	豚	鶏			
市浦村		1,039	595	13	129	0	-	肉乳 269x		x	-	-	-
小泊村		79	41	2	22	-	-	-	60	-	x	-	-
中里町		5,438	4,775	91	254	33	164	26	95	-	-	-	-
三厩村		41	9	6	26	0	0	-	-	-	-	-	-
今別町		635	340	20	99	2	-	28	-	x	x	-	-
蟹田町		715	504	14	71	-	33	肉乳 18x	x	-	x	-	-
車力村		3,785	1,944	194	1,203	8	55	192	187	-	2	-	-
計		11,732	8,208	340	1,804	43	252	533x	342	x	2x	-	-

第40次青森県農林水産統計年報より、麦雑類には豆、いも類も含む。

※ x は公表できない数値

各 論

I 地形分類図

1. 地形概説

「小泊」図幅の地域は青森県の北西部、津軽半島の西端に位置している。図幅の西部にはその先端に先第三系の地層からなる小泊半島が日本海に突出している。図幅中央部から北部は、海岸低地と狭少な谷底平野をのぞけば、四ッ滝山、木無岳を中心とした険しい産地である。図幅南部は津軽平野の北端部分で、十三湖の水域があり、それをとりまくように、南から十三湖に注ぐ岩木川の三角州の低地、湖と日本海を隔てる屏風山砂丘地の北端部、湖の北方には東西方向に広がる台地とそれを刻む小河川の谷底平野が分布する。

図幅の大部分を占める山地は津軽半島の脊梁山脈の一部であり、主として第三系の地層からなる険しい山地で、北は「龍飛岬」、南は「金木」、「油川」図幅の山地に連なる。なお、津軽平野、屏風山砂丘地の主部は南に隣接する「金木」図幅とその南の「五所川原」図幅内にある。

このように山地が大部分を占める図幅中央から北部での海岸は、狭い海岸低地の部分をのぞけば、荒磯の岩石海岸であり、これと対照的に図幅南西部は、津軽平野北部にあたり、十三個の付近は砂質海岸となっている。

台地は、標高、傾斜、開析状態、構成物質などから次のように区分した。なお、これら台地よりも標高が高く頂部の揃う面がいくつかあるが、それらは開析が進んでいるので台地とはしなかった。

高位面（Ⅰ面）	砂礫台地高位の上位面（G t I A）
	砂礫台地高位の下位面（G t I B）
中位面（Ⅱ面）	砂礫台地中位の上位面（G t II A）
	砂礫台地中位の下位面（G t II B）
低位面（Ⅲ面）	砂礫台地（G t III）

2. 地形細説

(1) 地形区

本図幅内の地形は、地形の標高、起伏量、傾斜区分、地形面の性質、地形の地域的まとまりから、山地（Ⅰ a～Ⅱ b）、台地（Ⅲ a～Ⅲ d）、低地（Ⅳ a～Ⅳ e）の地域的に大別される。それぞれの地形区は下記のとおりである。

「山地」	Ⅰ a	四ッ滝山山地
	Ⅰ b	大倉岳山地
「台地」	Ⅲ a	今別台地
	Ⅲ b	市浦台地
	Ⅲ c	金木台地
	Ⅲ d	屏風山砂丘地
「低地」	Ⅳ a	小泊川低地
	Ⅳ b	相内川低地
	Ⅳ c	今泉川低地
	Ⅳ d	薄市川低地
	Ⅳ e	津軽平野

(2) 地形分類

山地

四ッ滝山山地（Ⅰ a）

本図幅のほぼ北半分を占める山地で、この延長部は北隣の「龍飛崎」図幅へつづいている。図幅内の最高峰は増川岳（714m）で、四ッ滝山（670m）・木無山（587m）・浜名岳（603m）などがつらなり、標高のわりには起伏の大きい険しい山容を呈している。構成地質は第三系の安山岩類と凝灰岩類が主体であるが、一部には流紋岩や凝灰角礫岩がみられる。

この山地の起伏量は大部分が200～300m/㎢であるが、一部には300m以上/㎢のところもある。また傾斜区分では山地中心部が30°以上、周辺部では15～20°のところが多く、谷密度は20～30/㎢となっている。なお、図幅北東部の小泊半島下前地区には合計114haの地すべり危険箇所があり各種の防災工事が行われている。

大倉岳山地（I b）

本図幅の南東部に位置する山地で、この山地の主体は南東隣の「油川」図幅内にあり、主峰は大倉岳（677m）である。津軽半島背稜山地の一部で、主として第三系の砂岩・泥岩、凝灰角礫岩などからなる。本図幅内では大部分が起伏量100m前後/㎢の小起伏山地であるが、一部には150m以上/㎢の起伏量を示す部分がある。一方、傾斜は20°未満のところが多く20°以上のところは少ない。谷密度は25～30/㎢である。

台地

今別台地（III a）

本図幅の北東端にわずかに分布し、その主部は北隣の「龍飛崎」図幅にある。本図幅内では高位面の上下面、G t I A、G t I Bのみが分布する。標高はそれぞれ約100～150m、約70～90mである。

市浦台地（III b）

図幅の西部中央の海岸の市浦村脇元付近から、村の中心地の相内付近をへて東へ、十三湖北方の実取牧場、東方の中里町今泉、藤の森付近まではほぼ東西方向に分布している。この台地は西から東へ、磯松川、相内川、今泉川の小河川の本支谷により開析されている。この台地の高位面は、下位のG t I Bのみで、その標高は約60～100mであるが、この台地の中央部にあたる相内川低地の北方でまとまった平坦な部分の標高は約80～100m、その東西のまとまりのある平坦面の標高は約60～80mであり、四ッ滝山地をふくむ山地部の隆起運動がこの中央部やや高い標高に反映している。

中位面は上下2段のG t II A、G t II Bである。G t II Aは、相内川、今泉川低地の周辺に広く分布するが、とくに両低地間の実取牧場、太田付近が広い。ここでのこの面の標高は約40～70mであり、下位のG t II Bにくらべて凸凹があり緩く波うっている。今泉西方の国道339号沿いにある露頭では、8m以上の第三系（塩越層）上に不整合に約6mの厚さの、径6～10cm大の偏平礫を含む海成の段丘砂礫層がみられる。ここではこの段丘堆積物は厚さ1m以上の風

成砂層とクロボク土壌（約2～30cm）に覆われている。上位のG t I Bとの段丘崖は約10～20mで、下位のG t II Bとの段丘崖の比高は約5～10mである。相内川低地の北方から西方では、この面は南西方向に傾き、北東方に高くG t I Bと接するところでは約80mにもなり、G t I Bと同様に隆起運動の継続を示している。

中位の下位面であるG t II Bの標高は約15～30mで20～30mの標高のところの平坦面が広い。この面の上に市浦村の中心地である相内の集落が立地する。この他、この面は十三湖の北岸、相内北方の脇元と磯松付近にも分布する。脇元と磯松、そして相内付近のこの面の海岸よりのところでは、たとえば岩井牧場付近のようにかなりの部分が砂丘に被覆されている。なお、小河川沿いでは河岸段丘となり、相内川沿岸では比較的良好に連続して分布する。相内川沿岸の太田付近の露頭では、厚さ3m以上の第三系上に不整合に厚さ1～2mの角礫まじりの砂層、厚さ約1.5mのシルト・細砂層、厚さ約0.5mの径20cmの大礫もまじる泥・細砂層等の河岸段丘の堆積物がみられた。

G t III面の海成面は脇元の野脇から赤川の集落をのせる面で、その標高は約3～5mである。脇元南方では海岸付近は縦列型の砂丘が卓越して分布していて、段丘面はこれら砂丘に覆われていて分布、形態等是不詳であるが、縦列型の砂丘の標高は10～20mで、後述の十三付近の横列型の砂丘よりも高いことから、この縦列砂丘の下位にこのG t III面が存在しているとみられる。河岸段丘面としてのこの面は、相内川、今泉川の沿岸に断続的にみられるが分布が図化しえないほど狭小である。

金木台地（III c）

図幅南部やや東よりの薄市付近と薄市川沿岸にわずかに分布する台地である。ここでのG t II B面は湖岸よりにまとまって分布し、市浦台地のそれに比べて開析が進み丘陵に近くなっている。この面より下位の面もわずかだが、河岸段丘面として薄市川の沿岸に分布している。この台地の主部は南に隣接する「金木」図幅内にある。

屏風山砂丘地（Ⅲ d）

図幅西南部の十三湖と日本海との間に分布する砂丘地である。この砂丘地の主部は南に隣接する「金木」図幅にあるが、金木図幅にあるが、金木図幅内の砂丘地では、砂丘形態は海岸に直交するように発達した縦列砂丘またはそれに類する砂丘がほとんどである。それに対して本図幅内では、前潟などのラグーンの低地をはさむ2列の海岸線に平行な形態の横列砂丘が過半を占め、縦列砂丘は南縁の栗山集落と明神沼の間に分布する。この栗山西方の縦列砂丘の発達する部分は砂丘砂の下位に段丘堆積物がある。横列砂丘の頂の標高は10m以下であり、十三の集落が立地しているところでは5m前後と低平である。これに対して南の縦列砂丘地の標高は5m以上と高く、頂部は20m前後にもなっている。

低地

小泊川低地（Ⅳ a）

図幅北西部、小泊村の中心地に流れこむ小泊川が形成した低地である。低地沿岸にはG t I B面以下の台地面が狭いながら分布している。この低地の平均勾配は、南方の磯松川の低地とともに、河口付近までかなり大きい。低地上流域（左支板割沢との合流点から上流）の勾配は約10/ 1000、下流域では8～9/ 1000である。したがって、下流域でもいわゆる「鉄砲水」の水害が懸念される。

相内川低地（Ⅳ b）

この低地は、十三湖に注ぎ、湖の北方を流れる相内川の本支川が形成した低地である。相内川と国道339号とが交わる地点付近から西方、つまり下流域は標高3m前後の全く低平な三角州低地となる。この三角州低地の東方には、これと連続する台地と湖水域との間に形成された湖岸低地がある。国道との交点から東方、つまり中・上流域の谷底平野部分では、桂川などの右支の河川の谷底平野の平均勾配は10/ 1000前後で、本流のそれは桂川合流点から約4km上流域でも4/ 1000程度で緩やかであり、流路は蛇行がさかんである。桂川などの

右支の河川は直接木無岳の山地から流れる急流河川である。

今泉川低地（IV c）・薄市川低地（IV d）

これらの低地は、図幅東南部を流れ、十三湖に注ぐ今泉川、薄市川の低地で、最下流域の三角州の部分は津軽平野域の岩木川の三角州低地と結合している。両河川とも集水域の山地の起伏が小さく、したがって谷底平野部分の平均勾配も中流域で2～4/1000上流域でも6/1000と相内川本流のそれに似て緩やかであり、流路も蛇行している河区の部分がある。

津軽平野（IV d）

図幅南部中央にある岩木川の三角州低地である。この低地の主部は南隣の「金木」図幅、さらにその南の「五所河原」図幅内にある。当図幅内では、岩木川本流のほか、早川、三本川、鳥谷川等の分流河川があり、またその付近にはそれら河川に似た曲流河跡もみられ、典型的な三角州上河川分流の状態を示している。なお、岩木川の三角州前縁には円弧状の堰堤により囲まれた干拓地がある。

水野 裕（弘前大学教育学部）

堀田 報誠（八戸工業高等専門学校）

参考文献

- 藤井 敬三(1966) : 5万分の1地質図幅説明書「金木」 地質調査所
- 長谷 浩明(1963) : 津軽半島の海岸段丘について 東北地理 15-4
- 堀田 報誠(1966) : 氾濫原の地形形態 八戸高専紀要 第1号
- 堀田 報誠(1967) : 砂粒からみた下北半島頸部および屏風山の砂丘 八戸高専紀要
第2号
- 磯野 満(1991) : 北津軽郡小泊村の地すべり地形について 弘大地理 第27巻
- 小林亜津子(1986) : 津軽平野における沖積世の地形変化——とくに木造町付近の自然堤防帯の地形について 弘大地理 第22号
- 箕浦 幸治・中谷 周・佐藤 裕(1987) : 湖沼底質堆積物中に記録された地震津波の痕跡 ——青森県市浦村十三付近の湖沼系の例—— 地震 第40巻
- 箕浦 幸治・中谷 周(1990) : 津軽十三湖及び周辺湖沼の成り立ち 地質学論集 第36号
- 水野 裕(1957) : 屏風山砂丘の地形について 弘大地理 第3号
- 水野 裕・堀田 報誠・葛西 良徳(1968) : 津軽屏風山砂丘の地形 東北地理 20-1
- 水野 裕・堀田 報誠(1982) : 5万分の1「青森西部」図幅 土地分類基本調査 地形分類 青森県
- 水野 裕・堀田 報誠(1986) : 5万分の1「五所川原」図幅 土地分類調査所 青森県
- 水野 裕・堀田 報誠(1992) : 5万分の1「龍飛・蟹田」図幅 土地分類基本調査 地形分類 青森県
- 水野 裕・堀田 報誠(1993) : 「金木」図幅 土地分類基本調査 地形分類 青森県
- 村山 馨・松本 秀明・宮城 豊彦(1984) : 津軽平野の沖積層およびその周辺の地形 東北学院大学 東北文化研究所紀要 第15号
- 佐藤 裕・箕浦 幸治(1987) : 津軽地方の歴史地震津波 地球 9-4
- 角田 清美(1978) : 津軽屏風山砂丘地帯の地形について 東北地理 30-1

- 対馬 坤六・上村不二男（1959）：5万分の1地質証明書「小泊」 地質調査所
- 海津 正倫（1974）：岩木川河床より出土した埋没林とその形成環境について 第4
紀研究 13-4
- 海津 正倫（1976）：津軽平野の沖積世における地形発達史 地理学評論 49-11

II 表層地質図

1. 地質概説

本地域は津軽半島中西部にあたり、地質学的には第三紀地質区区分の東北日本内帯のいわゆるグリーンタフ地域に属する。また、本地域にわずかに分布する先第三系は、葛巻―釜石帯の北方延長に属すると考えられている。本地域の大部分は中山山脈と呼ばれる海拔600～700mの山地からなり、晩壮年期のやや急激な山容を呈している。

地形は一般に、この地域を構成している新第三系の岩相と地質構造に支配されている。すなわち中央部の四ツ滝山の南西には、北西―南東方向に走る顕著な背斜構造（磯松背斜）が認められ、その軸部にあたる地域は、海拔500～600mの北西―南東に延びた山陵を形成している。また、本地域で最も高い増川岳および四ツ滝山山頂などは、デイサイトの貫入岩体からなり、周囲の岩石に比べて堅硬なため、突出した地形を呈している。さらに、本地域南東部にみられる山地は、第三系を規制する袴腰岳ドームの西部に対応した地形である。

平野は十三湖周辺に発達し、これはこの付近から南に広がる津軽平野の北端に当たる。平野の西側には屏風山から延びる砂丘が発達し、十三湖の西側では砂嘴を形成している。また、十三湖北方には比較的広い段丘面が見られる。

本地域の新第三系を規制する地質構造は、いくつかの褶曲構造によって特徴付けられる。すなわち、小泊岬に局所的に分布する上部石炭系を基盤とし、新第三系は東北東に緩傾斜して、東北東に向かい順次上位層が分布するが、小泊から南南東に延び北北西にプランジする向斜（小泊向斜）軸を境に傾斜方向を西南西に転じ、順次下位層が露出する。さらに、冬部川流域から南南東に延び北北西にプランジする磯松背斜の軸部を経て、再び上位層が分布するようになる。本地域北東部には浜名岳山頂付近を通り北西―南東方向に延び南東にプランジする向斜軸、さらにその北東には津軽断層およびそれに沿って北北西―南南東に延びる背斜軸が存在する。

本地域における固結堆積物は、下位より粘板岩・チャートおよび石灰岩（小泊岬層）、安山岩質凝灰岩・同質凝灰角礫岩およびプロピライト（権現崎層）、礫岩・泥岩および砂岩（磯松層）、安山岩溶岩・同質凝灰岩・同質凝灰角礫岩・頁岩・流紋岩溶岩・プロピライトおよび玄武岩溶岩（冬部層）、輝石安山岩溶岩（龍飛安山岩類）、硬質頁

岩・ドレライト類・安山岩質凝灰岩および凝灰質砂岩（長根層）、硬質頁岩および軽石質凝灰岩（小泊層）・流紋岩溶岩（三厩流紋岩）、珪藻質泥岩および砂岩（塩越層）、安山岩溶岩・同質凝灰角礫岩およびデイサイト溶岩（今別安山岩類）、砂岩・泥岩および軽石質凝灰岩（蟹田層）に区分される。未固結堆積物は主要な河川に沿って見られるほか、本地域南西部の十三湖周辺に広く分布する。砂および礫（段丘堆積物）、砂（砂丘砂）、砂・礫および泥（谷底平野堆積物）、泥および泥炭（三角州堆積物）および草炭（砂丘間湿地堆積物）に区分される。増川岳および四ツ滝山山頂周辺に大規模なデイサイトの貫入岩体が見られるほか、北部海岸の青岩周辺に小規模な安山岩の貫入岩体が分布する。

断層は浜名岳東方を北北西－南南東に走る津軽断層が最も顕著である。津軽断層とほぼ同じ走向を持つ断層は、小泊北方、冬部川流域および上股川中流域に見られる。また、太田川、四ツ滝川および西股谷流域には、北北東－南南西の走向を持つ小規模な断層が発達する。

本地域には主に安山岩質の岩石が分布し、その風化殻は比較的薄いですが、一部には泥質岩が分布し、その風化殻は比較的厚いため、地形的にも傾斜が緩くなっている地域もある。本地域の鉱床や変質体としては、四ツ滝鉱床、三厩鉱床および小泊半島鉱化帯が挙げられる。かつて探鉱または採掘が行われていたが、現在では全て休山している。十三渡付近の十三湖湖岸の砂鉄や市浦村今別西方の珪藻質シルト岩がかつて採石されていた。主な地質災害としては、昭和58年に発生した日本海中部地震による墳砂および浮苗等が挙げられる。また、権現崎南部の下前では地滑りによる道路の陥没、移動および家屋土台の変形などの被害が続いてきた。小泊区幅南西部の津軽平野は地下水利用地帯となっている。

2. 表層地質細説

(1) 未固結堆積物

本地域における未固結堆積物には、砂丘間湿地の堆積物である草炭、三角州堆積物である泥および泥炭、谷底平野堆積物である砂・礫および泥、砂丘を構成する砂、段丘堆積物である砂および礫がある。

草炭 (P)

十三湖西部に2列に発達する砂丘の間には、前潟、後潟および明神沼という砂丘間湖沼を伴う砂丘間湿地が形成されている。この湿地には草炭および泥炭が堆積している。砂丘間湖沼における本堆積物の厚さは1m前後で、砂の薄層を挟む。

泥・泥炭 (m)

十三湖に流れ込む岩木川、鳥谷川、薄市川、今泉川および相内川の河口付近には、規模の大きい三角州が発達する。三角州は軟弱なシルト、粘土および泥炭で構成されている。

砂・礫・泥 (Sm)

本地域の主要な河川に沿って小規模な谷が発達し、これらの谷を谷底平野堆積物である砂・礫および泥が埋積している。集水域が広い相内川流域では特に発達する。また、脇元以南の海岸には小規模な砂丘が見られ、南は七里長浜に連続する。さらに、岩木川河口と鳥谷川河口の間には、比較的広い干拓地が存在する。

砂 (S)

十三湖西岩から磯松川河口付近にかけては、屏風山砂丘の北方延長である砂丘が南北帯状に分布する。十三湖西方の砂丘は浜堤状を呈し、標高は15m以下で、現海岸線と平行に2列発達する横列砂丘である。中粒砂よりなり、淘汰はそれほど良くない。十三湖西岩の砂嘴は有史時代においても年々発達してきた。約2,000年前までは海湾であった十三湖は、現在では幅200~300mのわずかな砂嘴の間隔(十三渡)によって日本海に通じている。

砂・礫 (Sg)

十三湖北岩に段丘面が広く発達する。また主要河川沿いにも小規模な河岸段丘が発達する。前者は標高50~80mで、後者の標高は100mを越えることもある。層厚は5~8mで、砂、粘土、礫などからなる。

(2) 固結堆積物

十三湖周辺を除く本地域には、石灰系および新第三系~更新統が広く分布している。これらの地層は下位より石灰系モスコウ統の小泊岬層、新第三系中新統の権現崎層、磯松層、冬部層、龍飛安山岩類、長根層、小泊層、三厩流紋岩、塩越層、今

別安山岩類および第四系更新統の蟹田層に区分されている。

砂岩・泥岩・軽石質凝灰岩 (K s)

本岩は、蟹田層と呼ばれ、津軽断層より北東の地域に分布する。主として凝灰質細粒砂岩およびシルト岩からなり、しばしば軽石質凝灰岩および細円礫岩を狭有している。細粒砂岩は固結度が低く、塊状無層理を示す部分、薄層理を示す部分および偽層を示す部分があり、大桑・万願寺動物群に属する貝化石などの浅海棲動物の化石を産する。シルト岩は概して凝灰質で、砂岩中に連続性の悪い薄層として観察される。礫岩は小規模な砂岩との互層として観察され、礫種は今別安山岩類など、本層の堆積盆の後背地の地質を反映している。少なくとも本層の一部は、浮遊性有孔虫の *Neogloboquadrina pachyderma* (sinistral) / *Neogloboquadrina incompta* 帯下部に相当する可能性が高い (根本, 1991)。

デイサイト (1 d)

本岩は、津軽断層以東の長川中流域およびその北方の今別安山岩類分布域に局所的に分布するほか、小泊向斜の軸部に分布する。主にデイサイト溶岩からなり、デイサイト質凝灰角礫岩および同質粗粒凝灰岩を挟む。凝灰角礫岩は異質岩塊として輝石安山岩の火山礫を含む。また、凝灰角礫岩の基質および粗粒凝灰岩は灰白色を呈し、軽石質で、石英、斜長石および黒雲母を含む。溶岩や本質岩塊も灰白色を呈し、石英および斜長石の班晶を多く含み、流理構造が見られることもある。

安山岩溶岩・凝灰角礫岩 (1 a)

本岩は今別安山岩類と呼ばれ、津軽断層以東に広く分布する。全体的に褐色～暗褐色の角礫化した複輝石安山岩からなり、岩相的には角礫状～塊状の違いはあるが、岩質的には殆ど変化はない。班晶として自形の斜長石、シソ輝石および半自形の普通輝石、磁鉄鉱を含み、ハイアロピリティック組織を示す。8.6±0.4 Maおよび8.26±0.52MaのK-Ar年代が得られている (通商産業省資源エネルギー庁, 1989, 1990)。

珪藻質泥岩・砂岩 (S s)

本岩は塩越層と呼ばれ、十三湖東岸、小泊向斜の軸部および津軽断層以東の長川中流域に分布する。主に灰色～暗灰色を呈する無層理ないし微層理の珪藻質シ

ルト岩からなり、灰色～褐灰色を呈する凝灰質泥岩および青灰色の細粒凝灰岩を挟む。風化した面は黄褐色を呈する場合が多い。十三湖東岸では南方に向かって粗粒化し、薄市川以南では塊状砂岩が卓越するようになる。Makiyama chitani, 放散虫および珪藻の化石を普遍的に産する。

流紋岩 (Mr)

本岩は三厩流紋岩類と呼ばれ、増川岳北東方に分布する。本岩は主として灰白色～帯赤白色を呈する流理の発達した流紋岸溶岩からなり、真珠岩および松脂岩の火山岩塊を含む白色の軽石質凝灰岩を伴う。班晶としては石英、斜長石および黒雲母が認められ、石基は微晶質である。

軽石質凝灰岩 (Kp)

本岩は太田川、今泉川および薄市川流域に分布する小泊層の硬質頁岩中に狭在する淡緑色～青灰色を呈するデイサイト質の軽石質凝灰岩および火山礫凝灰岩で、級化層理が見られることもある。軽石の発泡は不良で、石英および黒雲母を含む。

硬質頁岩 (Km)

本岩は小泊層と呼ばれ、本地域に広く分布する。堅硬ないわゆる硬質頁岩を主体とする。硬質頁岩は明瞭な板状層理を示し、硬質部と軟質部の互層からなる。硬質部は灰黒色～黄灰色を呈し、風化すると灰白色をなし、鋭い角片状の細片に砕け、貝殻状断口を示す。放散虫および珪藻化石により中部中新統（放散虫：Eucyrtidium inflatum 帯 a 亜帯～Eucyrtidium asanoi 帯；珪藻：Denticulopsis hustedtii 帯～Denticulopsis hyalina 帯）とされている（本山，1991）。

安山岩質凝灰岩・凝灰質砂岩 (Nt)

本岩は長根層の代表的岩相で、小泊向斜および磯松背斜の両翼に広く分布する。塊状～成層構造を示す緑灰色の凝灰質中～粗粒砂岩を主体とし、黄褐色、褐色および灰緑色など種々の色を呈した凝灰角礫岩や火山礫凝灰岩、暗灰色の泥岩を伴っている。磯松川や桂川の本層からはChlamys nisataiensis やCrassostrea gravitesta などの貝化石が産出する（岩井・多田，1986）。

粗粒玄武岩 (Nb)

本岩は長根層に属し、小泊図幅南東縁の薄市川上流域に分布している。粗粒玄

玄武岩，玄武岩溶岩および同質の火砕岩よりなる。班晶，石基ともに斜長石および普通輝石が認められ，間粒状組織を示している。杏仁孔を埋めて緑泥石が生じている。溶岩は大部分自破砕溶岩で，一部は枕状溶岩である。全般的に緻密であるが，変質を受け暗緑色ないし黒色を呈し，風化が著しいところでは灰白色となり，塊状に崩れやすくなっている。また，この溶岩に伴って玄武岩質火山礫凝灰岩および同質凝灰角礫岩がかなり厚く発達している。本岩は津軽半島中軸部の中山山脈地域における長根層の主体をなし，本地域のものは袴腰岳周辺にドーム状構造を成して分布しているものの一部である。

硬質頁岩 (Nm)

本岩は薄市川上流域に分布している長根層の玄武岩溶岩および同質火砕岩中に挟在している硬質頁岩で，概して黒色～暗灰色，緻密，堅硬である。

輝石安山岩 (Ta)

本岩は龍飛安山岩類と呼ばれ，小泊区幅北西縁に分布している。主として含カンラン石複輝石玄武岩質安山岩および複輝石安山岩の溶岩および火砕岩からなる。溶岩は緑青色～暗緑色を呈し，堅硬，緻密で，火砕岩は凝灰角礫岩あるいは火山礫凝灰岩からなり，溶岩と互層をなすところもある。その他にカンラン石複輝石玄武岩やデイサイトの溶岩および火砕岩，少量の流紋岩を伴う。14～9 MaのK-Ar年代が得られている（渡部・板谷，1990）。

玄武岩 (Fb)

本岩は折腰内川上流域，小泊川上流域および太田川中流域などに局所的に分布する。冬部層の最上部および下部に見られるカンラン石玄武岩溶岩である。班晶の量や石基の粒度には場所によりやや差異が認められるが，鉱物組成はほぼ変わらない。班晶は斜長石，カンラン石，シソ輝石および普通輝石からなり，石基は間粒状組織を示し，斜長石，単斜輝石および斜方輝石からなる。斜長石の班晶の一部は微細な方解石および緑れん石に交替されている。

安山岩 (Fa)

本岩は山王坊川中流域，桂川上流域および四ツ滝沢中流域に局所的に分布し，主に濃緑色～黒色のやや緻密な安山岩溶岩よりなるが，一部に同質凝灰角礫岩を挟む。班晶としては大型の斜長石が認められ，仮象から輝石と思われる有色鉱物

を有していたことが分かる。斜長石中には微細な絹雲母が含まれており、輝石は緑泥石によって交代されている。石基には斜長石が認められ、変質鉱物としては石英、緑泥石、絹雲母および酸化鉄が含まれる。また、杏仁孔が認められ、葉片状～鱗片状の緑泥石によって充填されている。石基は填間状組織を示す。

プロピライト (F P)

本岩は山王坊川中流域、桂川上流域、長根沢上流域および太田川上流域に局所的に分布する。主に輝石安山岩溶岩を原岩とするプロピライトよりなる。填間状組織を示し、斜長石や有色鉱物の班晶は緑泥石、絹雲母および方解石で交代されている。ところによって岩質がやや異なり、緑色、帯緑褐色、褐色などを呈する。

流紋岩 (F r)

白岩崎付近に分布する本岩は帯紫褐色を呈し、流理構造をもつ流紋岩溶岩からなる。南方に向かって凝灰角礫岩に移化する。班晶は主に斜長石と石英からなり、石基はガラスからなる。弁天島から鬮山にかけて分布する本岩は主に流紋岩溶岩からなり、一般に灰褐色～灰白色を呈する。流理構造が顕著であるが、一部は角礫化している。また一部に真珠岩および松脂岩を伴う。班晶は斜長石および石英からなり、石基は微晶質で斜長石、黒雲母などが認められる。

頁岩 (F s)

本岩は主として冬部川流域に分布する。黒色を呈し緻密であるが、いわゆる硬質頁岩ほど珪質ではない。層理が発達しており、淡緑色の凝灰質粗流砂岩や粗流凝灰岩を狭有する。表面はやや茶褐色を帯びる。

安山岩質凝灰岩・凝灰角礫岩 (F t)

本岩は磯松背斜の軸部と小泊南方から相内川の河口の北方にかけて分布する地層で、冬部層の代表的岩相となっている。本岩は主に塊状～成層構造を示すやや緻密な、緑色を呈する安山岩質凝灰岩ないし同質凝灰角礫岩よりなる。凝灰角礫岩は灰緑色を呈する粗粒な基質中に淡褐色、灰色、灰緑色などの安山岩の火山岩塊と、黄灰色～緑色の軽石を含んでいる。

礫岩・泥岩・砂岩 (l c)

本岩は磯松層と呼ばれ、磯松川上流域を模式地とし、小泊川上流域、桂川流域および四ツ滝沢上流域にも局所的に分布する。礫岩、砂岩および泥岩からなり、

一部に凝灰岩を伴う。礫岩は主として緑色～紫色を呈する安山岩の中～細円礫からなり、古生界から由来したと考えられるチャートの円礫も含む。基質は凝灰質砂岩である。本層の砂岩は凝灰質で灰褐色を呈する。泥岩は黒色を呈する。しばしば *Siratoria siratoriensis* や *Nipponomarcia nakamurai* など門ノ沢動物群に属する貝化石が産出する (Mizuno, 1964)。

プロピライト (Gp)

本岩は権現崎西部で権現崎層の安山岩質凝灰岩および凝灰角礫岩に狭在するほか、磯松川上流域、四ツ滝沢上流域および長根沢上流域にも局所的に分布する。暗灰色、褐灰色、暗緑灰色などを呈するプロピライトからなる。変質、珪化が著しく、原岩の組織、構造は不明瞭である。班晶は斜長石と普通輝石からなり、石基は斜長石とガラスからなる。ハイアロピリティック組織または填間状組織が認められるが、変質が著しく、脱ガラス化や、絹雲母および方解石などが観察される。

安山岩質凝灰岩・凝灰角礫岩 (Gt)

本岩は権現崎西部に広く分布するほか、磯松川上流域および四ツ滝沢上流域にも局所的に分布する。紫緑灰色～紫色の拳大の安山岩の火山岩塊からなる緑色の凝灰角礫岩を主体とし、同質凝灰岩を狭有する。凝灰岩は灰色～緑灰色を呈する粗粒凝灰岩である。権現崎層を代表する岩相である。

粘板岩・チャート・石灰岩 (Ks)

本岩は小泊岬層と呼ばれ、権現崎の西部に散点的に見られる。粘板岩、チャートおよび石灰岩よりなる。粘板岩は一般に千枚岩質で、黒色を呈し、風化面では黄褐色を示す。剥離性があり、鏡下では石英、絹雲母および方解石が認められる。チャートは淡緑色～淡紫色を呈する層状チャートである。石灰岩は灰白色を呈し、ウミユリ等の化石を産する。再結晶が進み糖状を呈する。チャートおよび石灰岩からコノドントが産出し、古生代石炭紀モスコウ世の地層とされている (村田ほか, 1979)。

(3) 火山性岩石

デイサイト (D)

本岩は増川岳および四ツ滝山の山頂付近に分布し、小泊層以下の地層に貫入したデイサイトである。四ツ滝山付近のものは絹雲母化および珪化が著しく、地表では流理構造が観察されることがあるが、鏡下では原岩組織が不鮮明となっている。増川岳付近のものは岩株状をなし、周囲に同質の岩脈を伴う。班晶は斜長石、石英、角閃石、黒雲母、シソ輝石および普通輝石からなり、石基は斜長石および輝石からなる。全般にやや変質を受け、緑泥石、方解石および沸石が認められる。

安山岩 (An)

本岩は小泊図幅北西縁の青岩付近に局所的に分布する。変質を受け有色鉱物は完全に緑泥石化しており、少量の絹雲母を伴う。填間状組織を有する含石英輝石角閃石安山岩である。

3. 表層地質分類と開発および保全との関係

(1) 風化殻

小泊図幅には主に安山岩質の岩石が分布し、その風化殻は比較的薄く、谷壁も急傾斜をなしている。しかし小泊北方から南東に延びる向斜の軸部と増川岳東方から薄市周辺にかけては泥質岩が分布し、比較的風化殻が厚いため、地形的にも傾斜が緩くなっている。小泊図幅南東縁の薄市川上流域は主に粗粒玄武岩より成り、風化殻の深さは中程度である。また小泊図幅北東縁に分布する砂岩・泥岩および軽石質凝灰岩（蟹田層）は風化殻は薄いですが、岩体そのものが比較的柔らかいことから、浸食に弱く深い谷壁が形成されている。

(2) 地質災害

本図幅地域における主な地質災害としては、昭和58年5月26日に発生した日本海中部地震による噴砂および浮苗等が挙げられる。日本海中部地震は、西津軽岩崎村西方約1,000kmの海底を震源としたM=7.7の地震で、特に津波による被害が大きく、青森県だけでも死者17名、被害総額518億円に達している。本図幅中では、南西部の十三湖西方の砂丘地域で噴射等が認められた。なお、十三湖およびその西方の砂

丘間湖沼の堆積物からは、過去250年間に5つの歴史津波が同定されている（箕浦・中谷，1988）。

脇元以北の日本海沿岸の大部分は標高数拾m以上の急崖になっており、脇元北方は土砂崩壊防備保安林になっており、一部に小規模な崖崩れが見られる。また、権現崎南部の下前では昭和11年頃より地滑りによる道路の陥没、移動および家屋土台の変形などの被害が続いてきた。これは流紋岩溶岩（冬部層）の基盤の上に載っている風化碎屑物が基盤面に沿って滑るために起きており、その滑り面は深いところで地下15～16mにある。地滑り防止のための杭打や水抜き工事が行われた。

(3) 鉱床および鉱化帯

本地域の鉱床や地表で観察された変質帯としては、四ツ滝鉱床、三厩鉱床および小泊半島鉱化帯が挙げられる。

四ツ滝鉱床の発見の年代は不明であるが、大正4年には既に探鉱が行われており、その後昭和36年まで断続的に試錐等が行われた。現在は休山中である。本鉱床は冬部層および長根層に貫入したデイサイト中に胚胎する硫化物鉱脈群からなる。黄銅鉱、黄鉄鉱、閃亜鉛鉱、方鉛鉱および重晶石が認められる。

三厩鉱床の発見の年代や詳細な沿革は不明であるが、かつて銅を対象にした探鉱が行われていた。第二次世界大戦前には既に探鉱が中止されていた模様である。本鉱床は今別安山岩類中の塊状～鉱染の複合鉱床で、小泊図幅北東縁の長川の支流である重右衛門沢を中心とした北西－南東方向、延長約1kmの狭長な鉱化帯である。重右衛門沢およびその北西方では粘土化（カオリン化）帯と明パン石を伴う珪化帯が認められる。また、重右衛門沢南方の畑ノ沢では珪化と黄鉄鉱鉱染が観察される。重右衛門沢で採取された黄鉄鉱や重晶石からなる鉱石片は、 $Au2.35g/t$ 、 $Ag13/t$ の分析値を示し、重右衛門沢南側の塊状珪化岩中の褐鉄鉱質部からは、 $Au5.7g/t$ 、 $Ag16g/t$ の分析値が得られている（通商産業省資源エネルギー庁，1990）。

小泊半島鉱化帯は第二次世界大戦後、田中工業（株）によって銅、鉛および亜鉛の探鉱が行われた模様である。本鉱化帯は小泊岬層および権現崎層から成る。これらの岩石は既して珪化または白色化変質が著しい。鉱床はこれらの岩石中の多数の鉱脈で、石英、重晶石、黄鉄鉱、方鉛鉱、閃亜鉛鉱および黄銅鉱から成る。脈幅は

2～20cmである。また、下前付近では、冬部層中の流紋岩がベントナイト化しており、昭和18～20年に中村滝製薬（株）によって採掘された。しかし終戦とともに廃鉱となっている。予想鉱量は約11,000,000 tであるが、品位はあまり良質ではない。

(4) 採石・採砂

十三渡付近の十三湖湖岸に、砂鉄層が薄く賦存している。明治以前にはこれを採取し、市浦村で精錬が行われていた。市浦村今別西方においては、塩越層の珪藻質シルト岩が採石され、主としてかまどやコンロの原料として用いられていた。また、太田川中流域には、長根層中の安山岩溶岩を採石した跡がある。

(5) 地下水

小泊図幅南西部の津軽平野は地下水利用地帯となっており、一般飲料、かんがい用などの水源として利用されている。本地域の被圧地下水は深度45～300mの深井戸より得られ、低地では自噴する。本地域の地下水には SO_4^{2-} がほとんど含まれない。これは硫酸イオンが還元されたものと考えられ、天然ガスなどを伴う地下水に見られる特徴である。

(6) 天然ガス

津軽平野の沖積層中にはガス徴が見られる。試掘によると、一般に100m以浅に薄い泥炭層が数層狭在し、泥炭層付近の砂礫層中にガス鉱床が形成されている。西側の岩木川河口付近が、ガス量、質ともに良く、ガス量は自噴井で200～500cc/min.、 CH_4 量は70～80%であるが、平野の東側は、河川伏流水の影響で、ガス徴は殆どない。

根本直樹（弘前大学理学部）

参考文献

- 青森地学教育研究会編(1975)：青森・日本海側をめぐる、築地書館
- 岩井 武彦・根本 直樹(1992)：表層地質図,青森県農林部農地計画課編, 土地分類基本調査「龍飛崎・蟹田」
- 岩井 武彦・多田 元彦(1986)：北村 信編, 新生代東北本州弧地質資料集, 島弧横断ルート, No.8, 宝文堂
- 箕浦 幸治・中谷 周(1988)：柱状堆積物試料から推定した十三湖と周辺砂丘間湖沼の堆積環境史, 昭和62年度弘前大学教育学内特別経費報告書「津軽十三湖の人文・自然科学的総合研究」
- 箕浦 幸治・中谷 周(1990)：津軽十三湖及び周辺湖沼の成り立ち, 地質学論集, vol.36
- Mizuo, A (1964)：A study on the Miocene molluscan fauna of the Kitatsugaru and Nishitsugaru districts, North Honshu.
Bull. Geol. Survey Japan, vol.15
- 水野 裕・堀田 報誠・葛西 良徳(1968)：津軽屏風山砂丘の地形, 東北地理, vol.20
- 本山 功(1991)：津軽半島地域の新第三系の地質と微化石層序, 日本地質学会東北支部・北海道支部合同シンポジウム講演予稿集
- 村田 正文・永井 敏彦・川村 真一(1979)：津軽半島小泊より石炭紀後期コノドントの産出とその意義, 青森地学, no.31
- 根本 直樹(1991)：コメント：渡島半島～津軽地域の鮮新・更新統微化石層序, 日本地質学会東北支部・北海道支部合同シンポジウム講演予稿集
- 根本 直樹(1993)：表層地質図, 青森県農林部農地計画課編, 土地分類基本調査「金木」
- 酒井軍治郎(1961)：青森県小泊村下前のベントナイト, 東北の工業用鉱物資源, no. 1
- 通商産業省資源エネルギー庁(1989)：昭和63年度広域地質構造調査報告書「津軽半島地域」
- 通商産業省資源エネルギー庁(1990)：平成元年度広域地質構造調査報告書「津軽半

島地域」

通商産業省資源エネルギー庁（1991）：平成2年度広域地質構造調査報告書「津軽半島地域」

通商産業省資源エネルギー庁（1992）：平成3年度広域地質構造調査報告書「津軽半島地域」

対馬 坤六・上村不二雄（1959）：5万分の1地質図幅説明書「小泊」，地質調査所
渡部 直喜・板谷 轍丸（1990）：津軽半島龍飛崎周辺の中新生火山活動とK-Ar年代，日本地質学会第97年学術大会講演要旨

Ⅲ 土 壤 図

1. 土壤分類の細説

本図幅は津軽半島脊稜山脈西方の山地、丘陵地を経て、小泊半島より日本海に至る地域および十三湖北岸の丘陵地、台地と、それらを解析する狭小な谷底平野と、十三湖東側の山地、丘陵地、台地およびそれらに挟まれた谷底平野群、また十三湖南側の岩木川、馬鹿川など大河川終焉部のデルタ地帯と、それに接続する干拓地、更に十三湖西方の屏風山砂丘北端部と十三湖大橋以北の砂丘地なども含まれる。本図幅に南接する金木図幅では屏風山砂丘地は別途解説したが、本図幅ではその面積が少ないので一括して解説する。

(1) 山地、丘陵地および台地の土壤

津軽半島脊稜山脈西方、小泊半島から十三湖北東部にかけての山地、丘陵地は主として褐色森林土を基調とする土壤の分布がみられる。標高の最も高い脊稜山地では湿性ポドゾル化土壤（袴腰岳統）がみられ、それより標高が下がるにつれ、尾根筋には造林の植生が余り良好でない弱乾性褐色森林土壤（土筆森山統）がみられ、また乾性ポドゾル化土壤（砂川統）がみられる。また沢沿いや斜面下部には林地生産性の極めて良好な湿性褐色森林土壤（戸ヶ沢統）が分布し、それらに挟まれて一般的な適潤褐色森林土壤（空沼統）が分布し、林地生産性は良好である。更に小泊半島にむかう丘陵地の尾根筋などには黄褐色の褐色森林土壤（板割統）、小泊半島上部には赤褐色の乾性褐色森林土壤（下前統）が分布するが、林地生産性は余り良好でない。これら土壤群に挟まれて戸ヶ沢統や空沼統が補間している。また本図幅南東部のヒバ林跡に極めて小面積でグライポドゾル化土壤（母沢統）が分布する。また山地間の沢筋に洪涵地的な残稜性未熟土壤（阿弥陀統）や岩石地が存在する。これら山地、丘陵地の小泊半島北部の終焉地で急崖（受蝕土）となって日本海に落ちている。

これら山地、丘陵地に続いて標高が低くなるにつれ、台地に接続するが、台地は十三湖北部から東部に広がり、これも主として褐色森林土を基調としている。十三湖北部は赤褐色の褐色森林土壤（唐川統）が分布し、またこれら土壤を畑地化し

た鍋田統が分布し、主として牧野として利用されている。また十三湖東部の台地は黄褐色系の褐色森林土壌（六郷統）が分布するが、造林的植生は良好でない。

また十三湖北部の台地（一部丘陵地）には淡色黒ボク土壌（折戸統）が分布するが、表土の腐食層は薄く、下層は黄褐色土壌である。

また十三湖西部には屏風山砂丘北端が分布し、十三湖大橋以北の砂丘へと続いている。砂丘未熟土壌のうち乾性のものを栗山統、砂丘間低地の湿性型のものを出来島統と分類した。前者は林地、牧草地、普通畑地として利用され、後者は主として水田として利用されているが、何れも生産性は低い。

1) 粗粒残積性未熟土壌

① 阿弥陀川統 (Amg)

沢沿いの洪涵地に出現する。沢礫や泥の堆積が特徴的で、層位の分化は進んでなく、水湿に富み、かつ排水良好である。

2) 砂丘未熟土壌

② 栗山統 (Krg)

砂丘凸部および台状地の乾性から適潤性のもも含めて本統とした。林地および畑地（牧草地含む）として利用されている。表層には土性の粗い腐植質の薄層をのせており、本図幅中の砂丘地では最大の分布を示す。

③ 出来島統 (Dek)

栗山統の湿性型。砂丘間低地や、沼、湿地に続く平坦な低位部および沢沿いにみられる湿草地、荒地などに出現、一部開田されている。下層に斑鉄があり、弱いグライ斑がみられる場合も多い。

3) 淡色黒ボク土壌

④ 折戸統 (Ord)

主として標高の低い丘陵地、台地上に分布する。表層に腐植層の薄層をのせ、下層は隣接する湿性褐色森林土壌に類似する。林地として利用されているが、植生は良好である。

4) 乾性褐色森林土壌

⑤ 土筆森山統 (Tku)

山地、丘陵地の尾根筋に普遍的に出現分布する。構造の発達が顕著で、H層またはH-A層の堆積が特徴的である。ブナ、ミズナラ、ヒバ林が多く、ヒバ林下及びヒバの伐採地跡は弱度のポドゾル化作用を受けた特徴が認められることも多い。

5) 乾性褐色森林土壌 (赤褐色系)

⑥ 下前統 (Shm)

小泊半島の丘陵地の尾根筋などに分布する。A草は余り発達せず、B層は5YR調の色調を呈する土壌である。前図幅の鷹森山統に類似するが母材など異なるので鷹森山統と区別した。造林的植生は良好でない。

6) 褐色森林土壌

⑦ 空沼統 (Kar)

斜面の中腹部などに普遍的に分布する。適潤で膨軟、A層が深く、団粒状および塊状構造が発達しているのが普通である。ブナ、イタヤ、ヒバ林などが多く、造林的植生は良好である。

7) 褐色森林土壌 (黄褐色系)

⑧ 六郷統 (Rok)

十三湖東部の台地上に出現分布する。全体的に密な堆積で粘質である。B層は黄褐色を帯び、堅果状、塊状構造が発達している。造林的植生は良好でない。

⑨ 板割統 (Itw)

小泊半島基部の山地、丘陵地の尾根筋などに分布する。A層は余り発達せず、B層は黄褐色を呈する。またB層に塊状構造の発達がみられ六郷統と類似するが、母材など異なるので区別した。造林的植生は良好でない。

8) 褐色森林土壌（赤褐色系）

⑩ 唐川統（Kkw）

小泊半島丘陵地中腹部および十三湖北岸の台地上に分布する。A層の発達が貧弱で、B層は5YR系の色調を呈する。前出の丑ヶ沢統に類似するが、母材などが異なるので本統を区別した。造林的植生は普通である。

9) 褐色森林土壌（畑地化型）

⑪ 鍋田統（Nbt）

唐川統などの褐色森林土壌が畑地化されたもので、十三湖北側の台地上などに広く分布する。畑地化のため層位は一定せず、下層は褐色～赤褐色の色調を呈する。放牧地や普通畑として利用されており、植生は普通である。

10) 褐色森林土壌（開田化型）

⑫ 浜名統（Hmn）

十三湖北部の台地上および本図幅北東部の河岸段丘上に極めて小面積で分布する。表土は開田のため括乱され、下層の褐色土層が露出していることも多い。水田としての生産力は極めて低く、畑地や荒地に移行する場合もみられる。

11) 湿性褐色森林土壌

⑬ 戸ヶ沢統（Tog）

山地、丘陵地の沢沿いや沢頭などに普遍的に分布する。A層上部には団粒構造が発達し、暗色のA層は深くB層へと漸変している。造林的植生は良好である。

12) 乾性ポドゾル化土壌

⑭ 砂川統（Skw）

ヒバ林下およびヒバ伐採跡地などに出現分布する。P○Ⅱ、P○Ⅲ型土壌、A○層およびA層の一部を欠くものもあるが、溶脱、集積の特徴が明確に認められるものである。なお本統には溶脱層が層状をなすものから斑状のものまで

を含めて図示した。

13) 湿性ポドゾル化土壤

⑮ 袴腰岳統 (Hgd)

ヒバの分布域の上部，ブナ，チシマザサ群落下に出現する。黒褐色のA層の下部からB層の上部にかけては腐食による汚染と集積によって暗銹色を帯びた部分がみられるのが特徴的である。

14) グライポドゾル化土壤

⑯ 母沢統 (Moz)

ポドゾル化土壤分布地域の凹地，沢筋などに分布する。A層がよく発達しB層は腐食と溶脱による汚染で暗銹色を呈する。B層下部よりグライ斑がみられるのが特徴的である。その他は袴腰岳統に準ずる。本図幅では面積は極めて狭小である。

(2) 低地の土壤

山地，丘陵地，台地の沢筋から海，湖などに流れる河川沿いの周辺は狭小な谷底平野を形成し，細粒灰色低地土壤（磯松統），灰色低地土壤（高根統）が分布するが，土壤は酸化的で斑鉄が発達し生産力も高く，またグライ化の進んだ細粒グライ土壤（相内統），グライ土壤（内眞部統）もみられる。十三湖南側の岩木川などの大河川終焉部に広がるデルタ地帯には細粒グライ土壤（蓮川統），粗粒グライ土壤（再賀統），低位泥炭土壤（長富統）が分布し，主として水田として利用されているが，生産性は余り高くはない。またデルタ地帯に北接する干拓地は主として再賀統に属するが，排水不良で生産力は低い。更に岩木川河口付近の川原は粗粒グライ土壤（野田統）に分類したが，河口周辺は殆ど再賀統に類似し芦原となっている。

1) 細粒灰色低地土壤

⑰ 磯松統 (Ima)

狭小な谷底平野下流部に分布し，強粘質で斑鉄が発達し酸化的である。水田として利用され生産力も高い。

2) 灰色低地土壤

⑱ 高根統 (Tn)

狭小な谷底平野中流部に分布するが、土性が中粒質で、酸化的で斑鉄も発達する。水田として利用され生産力は最も高い。

3) 細粒グライ土壤

⑲ 相内統 (Au)

狭小な谷底平野下流部に分布し、グライ層の位置が高く強粘質で、表土は比較的斑鉄が発達している。主として水田として利用され生産性はそれ程低くない。

⑳ 蓮川統 (Hk)

十三湖周辺のデルタ地帯終焉部に広く分布する。全層還元的で斑鉄は発達していない。下層に泥炭や砂層が出現する場合もある。主として水田として利用されている。生産性やや高い。

4) グライ土壤

㉑ 内眞部統 (Ump)

丘陵間の沢筋に狭小に分布する。表土は腐植に富み、下層にグライ斑を示す。主として林地であり植生は普通である。

5) 粗粒グライ土壤

㉒ 再賀統 (Sg)

十三湖周辺のデルタ終焉部および干拓地帯に広く分布する。表層は腐食に富み、次層は強いグライ斑を示す砂層となっており、泥炭を含む場合が多く、斑鉄は殆ど発達しない。主として水田として利用されており生産性は低い。一部荒地などもみられる。

㉓ 野田統 (Nod)

岩木川河口付近および旧川原跡に分布する。殆ど砂質で、中流地域と異なり河口付近は殆ど再賀統に類似する。荒地が殆どで、一部水田として利用されて

いるが生産性は低い。

6) 低位泥炭土壌

㊸ 長富統 (Nag)

十三湖南側の広大なデルタ地帯中央部および狭小な谷底平野の一部に分布する。40cm内外より低位泥炭層となっており、排水不良の有機物過多土壌で主として水田として利用されているが生産性は低い。

7) 受蝕土

㊹ 受蝕土

龍飛崎から小泊に至る西部の海岸沿いの急崖および小泊基部南側の一部に出現するもので、風蝕や流亡によりA層の殆ど全部が失われたものである。表層近くから多量の石礫を含み、土層は極めて薄い。

成田 春蔵 (青森県農業試験場)

中嶋 敏祐 (青森県林業試験場)

相馬 駛春 (青森県農業大学校)

松尾 弘 (東北エンジニアリング㈱)

IV 土地利用現況図

1. 農用地

本図幅に関係する7町村の土地利用をみると、耕地面積は9,182haで総面積の13.2%を占め、うち地目別割合は、水田が74.2%と最も高く、次いで普通畑16.9%、牧草地8.5%となっている。

1) 水田

7町村の総水田面積は6,818haとなっているが、本図幅分は29.1%にあたる約1,985haとなっている。

本図幅に分布する水田は、国営十三湖干拓事業で造成された水田が主で、その他小河川の流域に小面積が点在する程度である。

2) 普通畑

十三湖周辺の低地を除いて、本図幅内は標高が高く普通畑がわずかに存在する。

3) 草地(人工草地)

市浦村、中里村に数団地存在する程度で、面積も約692haと少なく、肉用牛、乳用牛の牧場として利用されている。

2. 林地

図幅内に占める林地の割合は88.1%で、そのうち91%が国有林で天然林の広葉樹林(チシマザサ-ブナ群団, ブナ-ミズナラ群落)天然林の針葉樹林(ヒノキ-スナロ群落)及び人工林(スギ)が主に植生している。

3. 市街地村落

主に、十三湖周辺の低地部に集落が形成されているほか、日本海沿いに走る国道339号線上に集落が点在している。

4. その他

7町村の土地利用の形態別面積と土地利用の規模区域指定面積は第IV-1表及び第IV-2表のとおりである。

笹森 金治(青森県農林部農地計画課)

第IV-1表 土地利用の概要

(単位：ha)

区分 市町村	総面積 km ²	耕地計	耕地内訳				宅地	山林		その他
			田	畑	牧草地	樹園地		国有林	民有林	
蟹田町	116.39	673	484	89	99	1	94	8,766	1,156	950
今別町	125.24	664	400	101	161	2	95	9,045	1,544	1,176
三厩村	65.27	41	14	26	-	1	47	5,642	214	583
車力村	62.17	2,520	1,610	827	80	5	172	734	1,618	1,173
中里町	151.63	4,030	3,620	298	97	15	258	7,953	1,429	1,493
市浦村	111.74	1,140	641	192	305	1	75	5,682	1,387	2,890
小泊村	64.49	114	49	24	41	-	61	5,304	294	676
計	696.93	9,182	6,818	1,557	783	25	802	43,126	7,642	8,941

資料：耕地及び山林について第40次青森水産統計年報より

宅地については、固定資産価格概要調書（5年度）より

第IV-2表 土地利用の規制区域指定

(単位：ha)

区分 市町村	市町村 面積 km ²	都市計画 区域	市街化 区域	市街化 調整区域	農業振興 区域	農用地 区域	保安林 区域	自然公園 面積
蟹田町	116.39	448	-	-	2,866	748	2,882	-
今別町	125.24	-	-	-	3,100	927	2,420	353
三厩村	65.27	-	-	-	470	170	1,001	1,450
車力村	62.17	-	-	-	5,127	2,477	2,038	1,398
中里町	151.63	-	-	-	7,705	4,213	3,772	105
市浦村	111.74	-	-	-	5,018	1,267	1,734	2,796
小泊村	64.49	-	-	-	755	221	429	2,804
計	696.93	448	-	-	25,041	10,023	14,276	8,906

資料：都市計画区域は、青森県の土地利用平成6年3月

農業振興区域は、農業振興区域整備計画総覧平成6年3月

保安林は県治山課資料による（平成6年3月）

自然公園は県自然保護課資料による（平成4年3月）